

女性アスリートのライフストーリーから 顕在化されたスポーツ界の問題

井 上 則 子
山 田 ゆかり

女子のゲームが生き残れるかはあなたたちにかかっている。
女子競技の価値を上げるために努力してほしい。
— マルタ・ビエイラ・ダ・シウヴァ (サッカー／ブラジル)¹

序章

女性を排除して始まった近代オリンピックに象徴されるように、スポーツは男性中心の世界であり、ジェンダーの最後の砦²とも言われている。スポーツに関わる女性たちは、偏見や固定概念と闘い、自らの手で歴史を拓き続けているが、ブラジルの女子サッカー選手マルタ・ビエイラ・ダ・シウヴァ (Marta Vieira da Silva) もその一人である。7歳でボールを蹴り始めてから、女性がサッカーをすることへの偏見と闘ってきたマルタは、2002年にブラジル代表に招集された。それ以来、世界最優秀女子選手賞を6度受賞、ワールドカップの通算17得点は男女で最多の記録である³。また、2018年より国連女性機関の親善大使を務め、ジェンダー平等を訴えている⁴。冒頭のメッセージは、

¹ ブラジル出身の女子サッカー選手。ナショナル・ウーマンズ・サッカーリーグのオーランド・プライド (アメリカ・フロリダ州オーランドがホームタウン) 所属 (オーランド・プライド『オーランド・プライドホームページ』<<https://www.orlandocitysc.com/pride/>> アクセス日: 2021年8月19日)。

² 井谷恵子「スポーツにおけるジェンダー構造の現状を見る」『スポーツ・ジェンダー学への招待』飯田貴子・井谷恵子編著、明石書店、2004年、20。

³ 潮智史「タイトルがほしいすべての女性のために」『朝日新聞』朝刊、2021年8月1日。

⁴ UN WOMEN『UN WOMEN』<<https://www.unwomen.org/en/news/stories/2018/7/press-release-un-women-announces-marta-vieira-da-silva-as-goodwill-ambassador>> アクセス日: 2021年8月19日。

2019年サッカー女子ワールドカップ準々決勝で敗退した時に、若い世代の選手たちへ向けて残したものである⁵。「ブラジルの選手だけに宛てたものではない。すべての女性アスリートに向けたものだ」として、マルタ自身も世界王者のタイトル獲得とスポーツ界の偏見や格差をなくすこと、「(この二つの)どちらも大切。だから私は両方を追いかける」と公言している⁶。

ジェンダーの最後の砦であるスポーツ界には、現代社会のひずみを反映したジェンダーに関する問題が様々な形で横たわっている。例えば、セクシュアルハラスメント⁷、パワーハラスメント⁸、暴力⁹、女性スポーツの商品化^{10,11}、学校や組織における女性の役割¹²等の多様な問題である。実際に、スポーツに関わる女性たちは、これらの問題とどのように向き合っており、生きているのだろうか。先行研究では、女性アスリートやその関係者たちは自らが声をあげて問題を解決するには困難な状況であると報告している^{13,14}。あるいはこのような現実を当たり前として捉え、問題と認識していない場合があることも明らかになっている¹⁵。スポーツ界に存在する問題を可視化する必要性が指摘されているにも関わらず^{16,17}、それらを女性アスリート自身が

⁵ 潮智史、前掲書。

⁶ 同上書。

⁷ 山田ゆかり・井上則子「女性アスリートが抱える課題 ―セクシュアルハラスメントに着目して―」『津田塾大学紀要』49、2017年、249-266。

⁸ 例えば、2018年女子レスリングでオリンピック4連覇を果たし、国民栄誉賞を受けた伊調馨選手(ALSOK)が、日本レスリング協会の栄和人選手強化本部長からパワーハラスメントを受けたとして告発した。2018年には、この他にも女子体操選手によるパワーハラスメントの告発問題があった。この2件については、第1章で詳しく述べる。

⁹ 2015年、女子柔道日本代表監督による暴力事件がメディアに大きく取り上げられて社会問題化した。この件についても、第1章で詳しく述べる。

¹⁰ 登丸あすか「スポーツコマーシャルズム」『よくわかるスポーツとジェンダー』飯田貴子・熊安貴美江・来田享子編著、ミネルヴァ書房、2018年、66-67。

¹¹ メディアによる女性アスリートの描き方をめぐる批判は、「幼児化・性愛化」「周縁化」「矮小化」の3つにまとめられている。つまり「男の眼差し」のもとで女性アスリートが「見られる性」として描かれているという指摘である(森田浩之『メディアスポーツ解体―<見えない権力>をあぶり出す』NHK出版、2009年、91-124)。

¹² 山口理恵子「女性とスポーツ―現代の課題―」『現代スポーツ評論』33、創文企画、2015年、36-47。

¹³ 熊安貴美江「ハラスメント・暴力・スポーツ―セクシュアル・ハラスメントの可視化がめざすもの」『現代スポーツ評論』33、創文企画、2015年、60-72。

¹⁴ 荒木香織・小谷郁「トップスポーツに関わる女性のアスリート・コーチ・理事の経験を探る」『SSFスポーツ政策研究』1(1)、2011年、12-17。

¹⁵ 熊安貴美江、前掲書。

¹⁶ 同上書。

¹⁷ 山田ゆかり・井上則子、前掲書。

自分の言葉で語った記述は少なく¹⁸、むしろメディアが受け手の興味を引く物語を盛り込みつつ、彼女たちの活躍を報じることが多い¹⁹。本研究では、女性アスリートのライフストーリーを分析し、その語りからスポーツ界の問題を可視化することを試みる。

第1章 スポーツに関わる女性の現状

そもそも、スポーツに関わる女性たちが問題を抱えているということは、いつ表出したのか、また、彼女たちはそれらとどう向き合ってきたのか、時間の流れを追いながら、からだ、こころ、さらには人権、という視点で考えてみたい。

1985年の東京国際女子マラソン、旧東ドイツのビルギット・ワインボルト選手がランニングパンツを赤くしてゴールの国立競技場へ入ってきた²⁰。係員の制止にも関わらずゴールラインを踏んだ。タイムは2時間36秒29、2位の成績だった。当時東ドイツはスポーツ大国として厳然とした地位を誇っていた時代、国を代表する彼女たちにとって、いかなる理由でも国際大会を棄権することは同時に生活を捨てることに匹敵した。観客たちは女性選手の生理的現象を目の当たりにした。

1992年の高校女子駅伝の土壇場でのアクシデントだった²¹。左足を引きずり泣きながらゴールした女子選手のゆがんだ顔が痛々しかった。チーム監督によれば、先頭でたすきを受けとったアンカーの選手が途中でかわされ、その選手がついていこうとストライドを広げた時に、ガクッと捻ったとのこと、診断は全治6か月の疲労骨折だった。苦しくてもチームのために走る、という信仰は「だから自分がある」という犠牲的精神を作り上げていった。

¹⁸ 日本では当事者の語りはほとんどないが、例えば米国では、学校教育における男女平等を定めたタイトルⅨ「米国内における何人も、連邦政府が助成する教育プログラムや活動において、性別を理由に参加を阻まれたり、利益を享受できなかったり、差別されることがあってはならない」(米連邦法)が制定されており、女性スポーツの問題解決のために、先駆的な活動を行っている。このタイトルⅨの制定40周年を記念して制作されたESPN Films: Nine for IXは、米国スポーツ界における女性たちの葛藤や闘争、改革を映像としてまとめたものである。日本では映像にできないことや発言できないことを、赤裸々に表現したDVDである。このように米国では、スポーツに関わる女性の現状を当事者自らが語ることも多い。

¹⁹ 森田浩之、前掲書。

²⁰ 『朝日新聞』朝刊、1985年11月18日。

²¹ 山田ゆかり「スポーツは男女を差別する 女性のための運動生理学」『週刊アエラ』1993年1月19日、63。

「女性とスポーツ」にある「難」を世間が知るのは、皮肉にもメディアを通して見るトラブルに合った選手の姿からだった。日の出の勢いで日本の女子マラソン選手が勝っていく、その場面をとらえようとメジャーな女子マラソン大会の中継がなされるようになった。紙面でも話題が増えた。それは1993年ドイツ・シュツットガルトでの世界陸上競技選手権大会で、浅利純子選手が日本女子として初の金メダルをとったところからだ。高橋尚子選手、有森裕子選手、野口みずき選手らが牽引し、次々と世界レベルの選手たちが輩出された。ところが、すでにそのとき課題は見えていた。ピークを迎える選手の年齢がどんどん低くなり、成熟したランナーの多い諸外国と比べると特異な現象となった。陸上界の話だけではない。スポーツ界全体で、女性アスリートが活躍し始めると、徹底した勝利至上主義は、カリスマコーチの出現、偏見に満ちたメディア露出、選手のブランド化などをエスカレートさせた。弊害が徐々に積み重なり、周囲どころか当事者さえ気づかないうちに、からだどころが壊れていった。自己を見失うことすら当たり前になっていった。

さらに深刻な問題は、女性アスリートたちの人権や尊厳を冒す行為がスポーツを行う現場でまかり通ってきたことだ。コーチと選手は決して対等ではなく、高低差の大きい主従関係が当たり前になった。権力構造と男性社会が相まった組織は、特に女性アスリートたちにNO!と言わせない圧力をかけ、絶対服従に近い立場を強いた²²。2000年8月、ひとりの女子高校生が警察に訴えた²³。スポーツ部活動中、指導者から性的嫌がらせを繰り返し受けたというものだ。起訴状にある被告のわいせつ行為は破廉恥極まる内容だった。告訴から公判は22回、足掛け3年間を経て2003年12月結審した。法廷で争われたのは「わいせつ行為があったか、なかったか」ではなく、原告が情緒不安定で妄想・虚言癖があるとして訴えが作り話であるかのよう方向づけられたことだ。被害は部員だけでなく卒業生にまで及んだが、原告を除き、だれひとり証言台に立つ人はいなかった。

理不尽な扱いに女性アスリートたちが社会に対し声を挙げなかったわけではない。2013年に発覚した女子柔道強化選手へのコーチ陣による慢性的かつ屈辱的な暴力暴言行為は、「全日本柔道連盟女子ナショナルチーム国際強

²² 山田ゆかり・井上則子、前掲書。

²³ 『朝日新聞』朝刊、2001年10月2日。

化選手15名」名義の声明文を代理人である弁護士の代読で世間に訴えた²⁴。「(略)…監督によって行われた暴力行為やハラスメントにより、私たちは心身ともに深く傷つきました。人としての誇りを汚されたことに対し、ある者は涙し、ある者は疲れ果て、またチームメートが苦しむ姿を見せつけられたことで、監督の存在におびえながら試合や練習をする自分の存在に気づきました…(中略)…ロンドン五輪の代表発表に象徴されるように、お互いライバルとして切磋琢磨し励ましあってきた選手相互の敬意と尊厳をあえて踏みじめるような連盟役員や教会体制陣の方針にも、失望し強く憤りを感じました…(略)」²⁵

2018年1月には、女子レスリング代表の伊調馨選手がかかわる問題が起きた²⁶。オリンピック4連覇を果たした伊調選手が日本レスリング協会の選手強化本部長からパワーハラスメント行為を受けたとして、レスリング関係者が、協会を監督する内閣府の公益認定等委員会に告発状を送っていたことが分かった。告発者の代理人弁護士事務所が明らかにしたことだ。告発状によると、伊調選手が本部長から指導を受けていた出身大学を離れ拠点を東京に移した後、伊調選手のコーチを強化委員からはずしたり、練習拠点への出入りを禁止にしたりしたという。本部長は新聞の取材に対し、「協会が対応します。(伊調選手とは)仲が悪いわけではないし、私が練習をどうこういう話ではない」とコメントした。

現在、伊調選手は日本体育大学女子レスリング部の外部コーチを務めている。東京オリンピックには惜しくも出られなかったが「今後のことは何も決めていませんが、選手・指導者としてレスリングがより魅力ある競技として発展していけるよう、今後とも力を尽くしていきたいと考えております」²⁷とやっている。渦中の本部長は第一線から退いたが、いままた元に戻っている。

²⁴ 辻口信良・岡村英祐「柔道女子トップアスリートの悩みと苦しみ」『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』森川貞夫編、かもがわ出版、2013年、93-111。告発した女性アスリート15名の代理人であった辻口信良・岡村英祐が、事件の内容について詳細に報告している。この暴力事件のより深い社会的背景として、1)日本の教育界全体の中で、自主性・自律性を育む手法が遅れていた。2)柔道界自体の古い体質、これは段位制度ともからみ、姉弟の関係が濃厚で、極端な縦社会を強調する強固な体制であることと関連する。3)監督らによる暴力・ハラスメントが、行為者自身に意識されずに行使され、それが長期間連鎖的に継続していた。以上の3点を指摘している。

²⁵ 読売新聞運動部『女性アスリートは何を乗り越えてきたのか』中公新書ラクレ、2013年、147-167。

²⁶ 『朝日新聞デジタル』2018年4月9日 <<https://www.asahi.com/articles/ASL4943TGL49UTQP01V.html>> アクセス日：2021年9月16日。

²⁷ 『スポーツ報知』2019年12月1日 <<https://hochi.news/articles/20191130-OHT1T50269.html>> アクセス日：2021年9月16日。

2018年にはもうひとつのパワーハラスメントがあった²⁸。リオデジャネイロオリンピック体操女子代表の宮川紗江選手が、日本体操協会幹部を告発したのだ。当時宮川選手は18歳だった。双方の言い分は食い違い、泥沼化していった。その3か月後、日本体操協会の第三者委員会は「パワハラはなかった」と調査の結果を発表、騒動は終わったかに見えた。宮川選手はその後の外部インタビューでこう述べた。「これだけやったのに、という気持ちは正直ありました。それにこれだけじゃ変わらないというのも思いました…(中略)…反論すれば、また同じことを繰り返すだけですし…(中略)…勇気を出したということに変わりはないのですが、やっぱり伝えなかったというのが一番大きかったです。このままうやむやにして、飲み込むのはいやでしたし、あったことを全部話そうと思いました…(中略)…今思えば伝えられてよかったです…(中略)…私がやったようなことはすぐにできるようなことではありません。私の場合は共通の理解者がいるからできたというのがあります…(略)」²⁹。あくまでも体操選手として上を目指す宮川選手は、SNS³⁰やyoutube³¹で自分の「いま」を随時発信中だ。

1980年代～1990年代のからだの発現、2000年代のセクシュアルハラスメントの訴え、そしてパワーハラスメントの告発と続き、確かに当事者のエンパワメントは高まっているようだ。とはいえ、アクションを起こしても、突き詰めていけば、スポーツにおける人権意識の壁にぶつかる。人権意識というのは、どんな小さなことでも、当事者の心身が傷つき、「幸せではない」と感じることであれば、それは人権侵害ではないか。数え切れないほどの女性アスリートたちが体験した成果の、裏側にある犠牲と屈辱を決して無駄にすることなく、次世代へつなげていくことが、これからのスポーツ界だけでなく社会の命題ではないだろうか。大きなテーマではあるが、それぞれが足元の身近なところから気づき、たとえ小さくとも「改革を試みる」のが前進の第一歩になるはずだ。本研究ではその一歩として、女性アスリートのライフストーリーを分析し、その語りからスポーツ界の問題を可視化することを試みていく。

²⁸ 『朝日新聞デジタル』2018年9月2日 <<https://www.asahi.com/articles/ASL926KWJL92UTQP037.html>> アクセス日：2021年9月16日。

²⁹ 『YAHOO! Japan ニュース』2021年8月13日 <<https://news.yahoo.co.jp/byline/kimmyungwook/20200813-00191709>> アクセス日：2021年9月16日。

³⁰ 『宮川紗江 Twitter』<https://twitter.com/sae_miyakawa> アクセス日：2021年9月16日。

³¹ 『さえちゃんねる / 宮川紗江』<<https://www.youtube.com/channel/UCrLjSTAyW70Sh15uE6UWEFg>> アクセス日：2021年9月16日。

第2章 方法

2.1 研究協力者

元女性アスリートで、現在指導者であるAさんは、小学校4年生の時に父の影響で競技（個人を特定できないように、本論文では具体的な競技種目は記載せず、競技と表記する）を始めた。中学校、高校の部活動で競技を続け、高校時代にはインターハイ、国体ともに2回出場した。高校は進学校であり、卒業後は大学に進学予定であったが、B実業団チームにスカウトされて入社した。同時に全日本に招集され、オリンピックに出場した。海外リーグでのプレイ経験もあり、帰国後はB実業団チームに復帰し、全日本総合選手権で優勝後、選手生活を終えている。

現役引退後は大学へ進学するが、卒業後に日本代表チームのアシスタントコーチを務めた。現在はアンダー世代の日本代表のヘッドコーチ、そしてC実業団チームのヘッドコーチである。スポーツライターである著者の一人が、Aさんを取材した関係から今回のインタビューを依頼した。女性アスリートの経験、そして女性指導者の経験が豊富であるAさんのライフストーリーを分析し、その語りからスポーツ界の問題を可視化していくという研究の主旨および学術目的以外にデータを用いないことを説明し、同意書に署名を得た。

2.2 語りデータの収集

Aさんのライフストーリー³²を把握するために、第一著者が半構造化面接を1時間10分行った。具体的には、事前に用意した4つの質問項目①競技を始めた理由、②競技を続ける中で感じていた矛盾や葛藤、③競技をやめた理由、そして④競技引退後を自由に語ってもらい、Aさんの話の流れに沿って追加で質問する形式をとった。その内容は本人の承諾を得て録音し、録音された語りのデータはすべて逐語的に書き起こした。

³² ライフストーリーは、個人が生活上で体験した出来事やその経験についての語りである。社会科学では、ライフストーリーは特別な会話形態としてのインタビューをとおして語られ、しばしばそれによって自己概念や自己と社会の関係のあり方が表される。(桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房、2005年、7-72)。

2.3 語りデータの分析

語りの分析にあたっては、「スポーツ選手のライフコース・パラダイムの要素と構造」³³を参考に、①スポーツとの出会い、②ピークパフォーマンス、③スポーツからの引退、④引退後のキャリアをキーワードに考察した。ライフコースとは、「個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列」³⁴や「個人が年齢別の役割や出来事を経つつ辿る人生行路」³⁵である。ライフコース論からアスリートを分析する意義の一つとして、選手の側から、選手が辿る道筋やスポーツ界の構造の把握が可能になることが指摘されている³⁶。またライフコース研究の方法としては、ライフストーリーが有効であることも検証されている³⁷。本研究では、女性アスリートのライフストーリーをライフコース・パラダイムの要素と構造に照らし合わせて考察を行い、女性アスリートの側からスポーツ界の問題を可視化することを試みた。

第3章 結果と考察

3.1 スポーツとの出会いの語り

Aさんの父親は元プレイヤーであり、その影響で競技を始めることになったが、スポーツとの出会いを次のように語った。

うちの父が東京の大学、東京の企業チームでやっていて、もともと。

生まれた時に父のユニフォームやプレー、現役中の写真が家にあり、物心付いた時から、競技は身近にあったので。

近隣の学校に、(父が)頼まれてコーチとして行く時に一緒に連れていっ

³³ 松尾哲矢「スポーツ選手のライフコース」『よくわかるスポーツ文化論』井上俊・菊幸一編著、ミネルヴァ書房、2020年、112-113。

³⁴ グレン・H・エルダー, Jr. & ジャネット・Z・ジール編著『ライフコース研究の方法』正岡寛司・藤見純子訳、明石書店、2003年、70。

³⁵ 森岡清美「ライフコースの視点」『ライフコースの社会学』井上俊他編、岩波書店、1996年、1。

³⁶ 松尾哲矢、前掲書。

³⁷ ジャネット・Z・ジール「多様性を理解するためのライフストーリー：階級、人種、およびジェンダーによる差異」『ライフコース研究の技法』グレン・H・エルダー, Jr. & ジャネット・Z・ジール編著(本田時雄・岡林秀樹監訳)、明石書店、2013年、306-332。

てもらい、高校生のお姉さんたちのお弁当を分けてもらったり、ボールで遊んだりしていたので、割と何か身近にあったスポーツで、小学校4年になってクラブに入れる年齢になったら、もう、絶対競技しようと決めていました。

身近にあったという言葉が繰り返されたことから、幼少時からなじんでいた競技であり、それを始めることがごく自然な流れであったことが読み取れる。「もう、絶対競技しようと決めていました」という語りからは、自分の意志でスポーツを始めたことも明らかになった。「もう」「絶対」「決めていました」という一つひとつの言葉は力強く、小学校4年生になってクラブに入る時を、心待ちにしていた様子がうかがえる。Aさんにとって、高校生のお姉さんたちはあこがれの存在であり、「早く大きくなって、お姉さんたちのようにプレイをしてみたい」という気持ちが伝わってきた。このようにAさんのスポーツとの出会いは、自分で選び取ったものであり、期待と希望に満ちた出発であったと推察される。

その後、Aさんは中学校、高校と部活動で競技を続け、高校時代にはインターハイ、国体ともに2回出場した。高校は進学校であり、B実業団チームからスカウトを受けた時には、大学に進学し競技を続けるか、入社して競技を続けるか迷ったという。

一応進学校で周りにはほとんど、大学進学をする。うちの高校を出て就職する子はいましたが、たぶん、年間に10人に満たない。

(大学進学が) 目的の学校なので、私も高校1年の時は当然、大学進学志望で。競技しているうちに、有名な、いわゆる当時の実業団の監督から声が掛かって。えー、まあ、迷いに迷いましたね、最後まで、どうするかというのは。

競技の強い大学に行って、たぶん、大学で勉強しながら競技をするだろうな、という初めは人生プランで、そういうコースで勉強していたんですがー。

これらの語りからは、高校卒業後に競技を続ける場は大学であり、実業団

という選択肢はなかったことが読み取れる。大学進学志望だったAさんが、なぜ実業団を選んだのだろうか。

うーん、私にスカウトに来てくださった監督が、まあ、結局そのチームを選ぶんですが、熱心というか、変わった方で、諦めないんですね。他の実業団さんからも、実は、他にも3つか4つぐらい、声掛けていただいたんですけど。私が大学に行くと言ったら、当時は、デュアルキャリアみたいなことは全然なかった時代で、大学だねといって引いてくださったんですけど。

私が行ったチームの監督は、何とか両方やる手だてはないかなと考えてくださる人で、最後まで両方を一生懸命考えてくれたんですね、一緒に。結局それは叶わなかったんですが、「実業団でうちのチームに来て大学に行つたつもりでおいでよ」と。「4年頑張つて、その時もう一回考えて、やはりそれでも大学行きたいと思ったら、そこからまた大学行けばいいじゃないか」と言ってくれたんですよ。他にもいろんな口説き文句があったんですけど、「ああ、そうか、順番が違うと思えばいいんだ、やめた後、大学行けばいい」と思ったのが、一番大きかったです。

Aさんは高校を卒業後、B実業団チームで競技を続けることを決めた時の理由を、上記のように語った。「当時、才能のある選手は高校卒業後に実業団に所属し、そこで鍛えられて一人前の選手になっていく風潮があった」と語っているが、スカウトに来た監督の言葉をきっかけに、「大学と就職の順番が違うと思えばよい」と自分で納得した様子が見える。競技人生における重大な決断であるが、スポーツとの出会いの時と同様に、自分の意志で進路を決めたことが読み取れる。迷った末に自分で出した結論、この結論を出すまでの過程において、Aさんの語りの中には、監督以外の人物は出てこない。このことから、監督の「大学に行つたつもり」「4年頑張つて」「やめた後、大学行けばいい」という言葉が、Aさんに与えた影響の大きさが分かる。そしてこの言葉は、B実業団チームに入ってからでもAさんの心の中で何度も繰り返されることになる。

強豪校ではない、いわゆる進学校で競技を続けていたAさんが監督からスカウトされた理由を尋ねたところ、「監督のコーチング哲学があり、有名校の出来上がった選手を育てるのは、あまりこう、面白みがないと。地方に

埋もれているような、ちょっと良さそうなやつを集めて、それをたたき上げるといふか。それがコーチングの醍醐味という方だったんですね」とAさんは語った。強い選手を集めてチームを作るのではなく、入部した選手を育てチームを築き上げていく監督の下で、Aさんは才能を伸ばし、輝かしい成績を残すことになる。

3.2 ピークパフォーマンスの語り

AさんはB実業団チームに所属すると同時に全日本に招集され、オリンピックに出場した。海外リーグでのプレイ経験もあり、帰国後はB実業団チームに復帰し、全日本総合選手権で優勝後、現役を引退した。高校卒業から現役引退まで10年、その期間のピークパフォーマンスに関する語りは、以下のようなものであった。

4年間だけ大学に行ったつもりでやるという約束だったので、初めは特にそうだったのですが、競技に対して後ろ向きというか、うまくいかないとすぐに「だって本当は大学行くつもりだった」というような、言い訳するところがあったりして。言い訳は本当に良くなかったなと、今も思うんですが、心情としては、もう、いつやめてもいい、ほんとうに来年やめてもいいと、ずっとやっているうちに、何か、オリンピックに出られることになって。

あれ、何か、ここまでやってきているけれどもという感じで、1年1年更新してきたという感じです。やはり、オリンピック出たり、その後、アメリカでもシーズンを経験したんですが、何ていうんですかね、自分の人生に、きっと、起こり得るであろうイベントが、その2～3年間に全部集中してきちゃって。

AさんはB実業団チームで競技を続けることになったが、心の中では「本当は大学に行くつもりだった。いつやめてもいい、来年やめてもいい」と思っていたという。その1年1年の積み重ねが10年という年月になった。Aさんは、ピークパフォーマンスの期間を「自分の人生に起こり得るであろうイベントが、2～3年間に全部集中してきた」と語った。彼女の現役時代の経歴は華々しい。4年間連続で得点王、オリンピックで入賞、日本人女性で初めてドラフトで指名を受けて海外リーグを経験、そして日本のB実業団に復

帰後は全日本総合選手権で優勝を果たしている。自分が成し遂げたことを「自分の人生に起こり得るであろうイベント」と喩えており、これらが自分の予想以上であったこと、そして、2～3年間に全て集中して起きたことに対する驚きや戸惑いがうかがえる。したがって「自分の人生に起こり得るであろうイベントが、2～3年間に全部集中してきた」という語りは、Aさんのピークパフォーマンスの象徴的な語りと考えられる。

ピークパフォーマンスの期間に理不尽だと思ったこと、矛盾や差別を感じたことはなかったかと尋ねたところ、以下の語りがあった。

当時、われわれの業界からすると、コーチと選手が、まあ、いわゆるこう、できているという言い方ですが、それはもう、どのチームにもあった話ですね。監督とそういう関係になった選手が、試合に出るようになるんです。毎日同じ練習をして、当時の練習は、今とはもう比べものにならないぐらい理不尽で、朝から晩まで練習して、「私、ここで殺されても、きっと誰も発見してくれない」というようなところまでやっているの、やはりこう、選手としても納得いかないところはあるし。

著者：現役時代は「当然のことなんだ、こういう世界では…」という気持ちはありましたか？

(どのチームにも)本当に日常茶飯事起こっている時代だったんです、あまりにも日常茶飯事で、当たり前とされていた時代なので、それは、悪いことだとか、自分たちの権利が侵害されているんだという発想を持つ間もなかったという感じでした。

もう、間違っているんじゃない、とやはり思うんですけど、あまりにもあり過ぎてというか、それが常態化していたので、おかしいよねと思いつながら、おかしいとはやはり言えなかったですよ。…(中略)…だから、納得していくしかないよねって。しかも、高校出て、社会の何たるかを全く知らないわけですから。それこそほんとうに葛藤ですよ。

女性アスリートのセクシュアルハラスメントに対する認識の甘さは「指導環境で不適切で受け入れられない性差別的な言動が生じて、それが彼女らをめぐる日常の一部であれば、それをいちいち問題視しては競技を続けられなくなる。女性競技者は黙って耐え、やり過ごすことで、自らの感覚を鈍化させているのではないだろうか」³⁸と解釈されている。「間違っていると思うが常態化しており、おかしいと思いつながら、言えない。納得していきたくない」というAさんの語りは、この先行研究³⁹を支持する語りであった。またスポーツ界におけるセクシュアルハラスメントの認識には一般社会よりも甘いという報告⁴⁰もあり、それについて「運動系部活動や体育会らしさとして表現される慣習や価値観などが、ややもすれば一般社会のそれから乖離し、一般社会が受け入れ難いものになってはいないだろうか。急速に変化する一般社会の価値観や考え方についていけているのだろうか。」⁴¹と考察されている。「高校出て、社会の何たるかを全く知らない」というAさんの語りからは、当時は競技中心の生活であり、競技だけに没頭する環境、いわゆる一般社会から剥離した環境で過ごしていたことが分かる。

著者：今もやはり、そういう風土はあるのでしょうか？

うーん。そうですね。あの一、恐らく、まだあるんじゃないのかな。…(中略)…ただ、われわれの時代から考えると、ハラスメントっていう言葉が、しっかり、認識されて定着されてきたってところもありますし。変わってきたなって。生理に対する理解も、すごく進んできた。

スポーツ界には様々な問題が存在しているが、それらに対して、アスリートや指導者の理解が深まってきたことが、この語りからはうかがえる。特に、女性アスリートのヘルスケアを学ぶ機会は増えており、指導者の女性アスリートの月経に対する理解は進んでいる^{42,43}。セクシュアルハラスメントに

³⁸ 熊安貴美江、前掲書。

³⁹ 同上書。

⁴⁰ 高峰修他「日本のスポーツ環境における大学生のセクシュアル・ハラスメント認識に及ぼす要因の影響—性別に着目して—」『スポーツとジェンダー研究』9、2011年、33-41。

⁴¹ 高峰修「女性スポーツとセクハラ—スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識の特徴から—」『体育科教育』59(12)、2011年、34-37。

対する理解も同様で、「ここ数年の社会全体のセクハラ認識の高まりを受け、構造的に被害を受けやすい女性たちが、以前よりもセクハラを『被害』として認識できる土壌が醸成されてきたことの表れかもしれない」「近年の社会的なハラスメント認識の高まりのもと、指導者研究なのでジェンダー平等を学ぶ機会が以前よりも増えたことが背景にあるのかもしれない」⁴⁴と解釈されている。

セクシュアルハラスメントの可視化は、女性競技の環境改善にのみ資するものではなく、スポーツにおいてより広範に作用する性的支配の形態を可視化し、スポーツ文化そのものの変化をもたらすための環境整備への不可欠な一歩であると指摘されている⁴⁵。したがって、今回のようにスポーツに関わる女性の語りを蓄積し、セクシュアルハラスメントをはじめとするスポーツ界に存在する様々な問題を可視化することが早急の課題であるといえよう。

3.3 スポーツからの引退の語り

超一流のスポーツ選手でも、10年以上トップの座に居続けることはないという。それは年齢の影響であり、反射神経が衰える、体力の回復が遅くなるなどである。引退の理由のトップ3は、1) 最終目標(ゴール)を達成した(やり残した課題はない)、2) 身体的な理由(けが、能力の低下、痛み)、3) 選手生活に疲れた(合宿などの異同、プライバシーの問題、マスコミとの問題)である⁴⁶。Aさんの引退の理由は何だったのだろうか。「現役を引退するのは、勇気がいると思いますが、やめようと思った理由は何ですか？」という問い

⁴² 能勢さやか・土肥美智子・川原貢「女性アスリートのヘルスケア」『理学療法学』42(8)、2015年、838-839。この論文では、部活動を楽しむ学生から競技スポーツに参加するアスリートまで、多くの女性が月経と上手につき合い、目標とする試合で最高のパフォーマンスができるよう、また過度なスポーツによる障害のリスクをひとつでも減らす目的で、女性アスリートのヘルスケアについて述べている。多角的な視点での対応が重要で、周囲のスタッフや保護者、学校医等の早い気づきが早期発見、早期治療につながると指摘している。

⁴³ 申恩真「女性アスリートの痛みをめぐるエスノグラフィー—サッカー選手の月経をめぐる対応から—」『スポーツとジェンダー研究』6、2018年、6-19。この論文は女性アスリートを医学的・心理的観点ではなく、新たな観点から支援するものである。女性アスリートは月経中であっても、チーム内の秩序に従おうとする。したがって、集団内における秩序を軸に月経を捉える必要性を指摘している。

⁴⁴ 高峰修・熊安貴美江「スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識にかかわる要因の検討」『明治大学教養論集』552、2021年、175-197。

⁴⁵ 熊安貴美江、前掲書。

⁴⁶ A. プティパ他著『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』田中ウルヴェエ京・重野三郎訳、大修館書店、2005年、118-153。

に対して、Aさんは次のように語った。

本気で、もうちょっと無理かなと思ったのが、体がもうついていかなくなって、当時、やはり練習量はすごく多かったですし、今までしたことないようなけがをするようになってからは、衰えゆく自分の体と、毎日向き合うのが、やっぱりすごくしんどいなって。

感情がものすごい、もう、振り切れるというか(オリンピックやアメリカでの経験などが)終わった時の、ドーンという落ち込み方が、やはりしんどくて。もう、身心共に続けるのはしんどいなという感じになっていました。

「しんどい」という言葉を何度も繰り返したことで、当時のAさんが身心共に疲弊した様子が伝わってきた。体の変化を「今までしたことないようなけが」「衰えゆく自分の体」と語っており、この変化に運動するかのように、心も大きく揺さぶられたことが分かる⁴⁷。大きな成果を達成した後に、アスリートが落ち込む事例は少なくない⁴⁸。多かれ少なかれ、ひとつの競技に専心してきたスポーツ選手、そして(結果を残した)エリート選手であればあるほど、引退時に抱える心理問題が存在するともいわれている⁴⁹。Aさんは単なる気持ちではなく「感情」、そしてその「感情」が「振り切れる」と語っていた。「感情が振り切れる」とは、バーンアウト⁵⁰したAさんの心情を吐露したものであろう。そして、それは結果を残したエリート選手であるAさんにしか語り得ないものであり、スポーツからの引退の象徴的な語りと考えら

⁴⁷ 一流のスポーツ選手によくみられるのが、けがによる引退である。スポーツのけが中には重症の可能性から免れることができないものもある。一般の人々と同様、スポーツ選手もけがに対する心構えができていないものであり、まずは精神的な面での予想外のことに対するショックに直面しなければならぬ(A. プティバ他著、前掲書)。

⁴⁸ 例えば、『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』を翻訳した田中ウルヴェ京は、ソウルオリンピックで銅メダルを取り21歳で現役を引退した後のことを、「スポーツしか知らない、まさに井の中の蛙だった私が考えられる未来は、つまらないものにしか思えなかった。『もう死ねたらどんなにラクだろう』。本音だった」と述べている(A. プティバ他著、前掲書、iv)。その経験から彼女は、アスリートのキャリアトランジションを支援する活動を行っている。

⁴⁹ A. プティバ他著、前掲書。

⁵⁰ 運動選手のバーンアウトの発症要因として、1) 病前性格、2) 報われない経験、3) 同一性の再確立の困難さ、4) 危機状態における相互性の稀薄の4つが指摘されている(中込四郎・岸順治「運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究」『体育学研究』35、1991年、313-323)。

れる。

勝ち続けなきゃならないことに関して、ものすごい、こう、徒労感というか、圧倒的な、疲労みたいなを感じた瞬間があって。あとは、もう一つ、競技をやってる以上、オフというかお休みでも、絶対競技のことが離れないわけですよ。明日も練習があるから、例えば1週間オフがあったとしても、いや、1週間後にまたやり始めなくてはいけない。どこかに必ず競技のこと考えているという生活から、いったん離れてみたかった。

休めないというのは、何年間も何年間も続けていたので、まあやはり、そういうのが、重圧になった瞬間、もう競技は続けるべきではないのでしょうけど。うーん、うん。もう、ちょっとやめたいなど、最後は思ったというのがありますね。

現役時代に、すべてがうまくいっているときは、引退の時期は自分で選べると考えがちであり、スポーツの選手の多くが、なんらかの目標を達成してから引退したいと考えているという⁵¹。Aさんもピークパフォーマンスの時は、勝つことを目標に練習を続けることは当然であり、何の迷いもなかったのであろう。しかし、勝ち続けることに対して「徒労感」「圧倒的な疲労」を感じた瞬間を、彼女は見逃さなかった。日本一という結果を残し、競技に見事に区切りをつけて引退したAさんであったが、現役時代の終盤は感情が振り切れた状態や体力の低下などに折り合いをつけて、競技を続けていたと推察される⁵²。

3.4 引退後のキャリアの語り

Aさんは現役引退後は大学へ進学し、卒業後に日本代表チームのアシスタントコーチを務めた。現在はアンダー世代の日本代表のヘッドコーチ、そしてC実業団チームのヘッドコーチである。引退後のキャリアについて、Aさんは次のように語った。

⁵¹ A. プティバ他著、前掲書。

⁵² Aさんはあるインタビューで、「引退する1年前くらいから引退の意向を伝えていましたし、周囲も受け入れてくれていました。最後の1年間は同じポジションの選手を育てるために、常に2人組で練習していました」と語っていた。

10年間やったんですけど、バーンアウトして、競技を引退したので。もう競技なんて見たくないし、指導者なんか、もっての外と思ってやめたタイプですね。

女性の現役選手、私もそうですけど、現役を引退した時は全然違うことやりたいと言って、いったんその競技からスパッと、離れる。実際にその言動を取る子は多いんですが、私の場合は、大学に行くということだったんですけど。でもね、多くがね、結局戻ってきますね。離れて初めて分かるってことが、たくさんあるんですよ。自分がどれだけ恵まれていたかとか、競技やることは、しんどかったけれども、それでもやっぱり、日常っていうものを経験すると、本当に何も無いのが日常なので。

われわれって、毎日しんどい練習はするけれども、試合に出て、自分でいろんなことをコントロールできる、万能感みたいなものを感じたりして。それってすごいことなんだというのを、何も無い生活に埋没して、初めて感じるがあったりして。

Aさんは「もう競技なんか見たくないし、指導者なんか、もっての外と思ってやめたタイプですね」と語った。実際に、引退後は競技以外のことをやろうとして大学、そして大学院へ進学している。ところが、競技から離れたことにより、かつての環境がいかに恵まれていたかを実感した様子が見ええる。引退後の生活を「本当に何も無いのが日常」「何も無い生活に埋没」と語っており、現役時代は競技中心の生活であったことが分かる。その厳しかった練習を思い返しなが、試合中には「自分でいろんなことをコントロールできる、万能感みたいなものを感じる」と語り、「それってすごいことなんだ」と、競技を通して得たものを言葉にした。「いったんその競技からスパッと、離れる。実際にその言動を取る子は多い」「多くがね、結局戻ってきますね」の言葉通りに、Aさんも大学院時代に大学のコーチを務めている。自らの希望ではなく求められてのコーチであったが、そこから指導者としてのスタートが始まった。

実はアシスタントコーチ時代が結構長くて。(女性がアシスタントコーチというのが)当然っていう世界ですね、当時は男性がヘッドコーチなんですね。私がアシスタント、えっとー、10～12年ぐらいずっとやっています。ヘッドコーチや監督になるという発想はなかったんですよ。やっぱりこう、女性でリーダーシップとっていくことに対して、まあ、うーん、違和感はないけど、周りにいなかったんで、ちょっと、私じゃないよなと思っていたんですけど。

著者：ロールモデルがないということですね。

ロールモデルというか、自分の周りに女性で、監督をやっている人が、あまりいない。まあ、中学校や高校の監督中には、女性も一時期に比べてすごく増えているんですけど、こと、トップリーグに関しては増えてないですね。

思い込みってというか、アシスタントならいいですけどね、監督は嫌ですって人は、すごく多い。

Aさん自身は「女性でリーダーシップとっていくことに対して、まあ、うーん、違和感はない」と語っていた。この違和感がないことが、現在のキャリアにつながっていったと推察される。女性のヘッドコーチや監督がいなかったというロールモデルの不在、そして監督は嫌だがアシスタントならばよいという、女性のリーダーシップの欠如が読み取れる。Aさんはロールモデルの不在について、その理由を「ライフイベントとどうしても重なるので敬遠されがち。はっきり言って、もう女性だけの問題じゃないですよ。パートナーの理解とか、周りの理解が絶対ないと、出産して子育てして、コーチなんて、まあ、はっきり言って無理なので」と述べた。

同様に、リーダーシップの欠如についても「日本のその伝統的な家族制度、旦那さんが前面に出て、女性はそれに3歩下がってついていくのが当たり前、そういう価値観で育てているから、当たりの認識というんですかね～」とAさん自身の考えを語ってくれた。このような語りからは、スポーツ界の問題として女性のライフイベントとの両立も浮かび上がってくる。女性特有の妊娠、出産、そして授乳等の一部の育児を含むライフイベントとスポーツ指導を両立させるには、夫をはじめとする家族の理解と協力が必要であること、

そして所属する組織の側の対応も不可欠であると報告されている⁵³。女性指導者は多くのサポートを必要とするため、スポーツ界では女性指導者の数が男性指導者に比べ圧倒的に少ない。

このような状況を受けて2015年に座談会が開催され、関係者が「女性がスポーツをする際に起きること」について意見交換をしている。そこでは女性指導者を増やすための議論も行われており、日本オリンピック委員会理事の山口香は「女性(アスリート)の場合は、高校卒業後すぐに社会人になるということが多いと思います。そこでいくら競技で結果を出したとしても、組織を率いる力があるかどうか、リーダーとしてやっていけるかどうかを考えると、女性が二の足を踏むということはありますね」「高卒から社会人で活躍した人たちが再教育し、自信を持って指導できるように育てていく必要があると思います。そういったことができなければ、アスリートとして頑張っ、それで終わりとなるようなアスリートの消費が続いていくだけです。それでは女性が自信をもって『指導者になる』と手を上げられるようにはなりません」「活躍した人たちがそのまま引退するだけでなく、指導者や連盟の代表者になっていくような長期的な戦略を描いていかなければいけません」と述べている⁵⁴。座談会から6年経った今、スポーツ界は女性によるリーダーシップが生起する場になったのだろうか。

うん、女性も増えてきて、だいぶ変わってきたなという感じはするのですが、そもそも、S級、われわれの協会では最上位の資格なんですが、受講者28人のうち女性は私1人なんですね。…(中略)…まだまだ、全体的にいうと女性がリーダーシップをとりにくい業界だとは思いますがね。

実際に、自分が今、ヘッドコーチをやってみて感じるんですが、みんな、ハードルを高く設定し過ぎちゃっているんじゃないかな、リーダーシップをとるということに対して。人の前面に立って、自分が決断していくって、それは大変なことだと思うんですけど。

⁵³ 金谷麻理子「女性競技者の抱える問題、女性指導者増加のための具体的方策」『体育学研究』60 (Report号)、2015年、1-11。

⁵⁴ 座談会「女性がスポーツする際に起きること」『現代スポーツ評論』33、創文企画、2015年、16-35。

上記の語りからは、状況は改善する方向に進んではいるものの、依然として女性がリーダーシップをとりにくい状況が明らかになった。Aさんは現在、この競技における数少ない女性ヘッドコーチである。女性指導者が抱える問題として「一般的に、トップアスリートの養成には、幼少期から専門的なトレーニングが不可欠であり、競技者として一人前になるまでの膨大な時間と労力を費やす。…(中略)…つまり、競技生活は逃すことのできない『今』の連続である。そのため女性指導者のなかには、スポーツ現場から一時的に離脱することを望まず、自分のライフイベントを先延ばしにする、あるいはあきらめる者も少なくない」そして「スポーツにおける数少ない女性指導者は、幾多の問題と向き合いながら自分なりのスポーツとの関わり方を決め、日々競技者と向き合っているのである」⁵⁵という報告がある。アンダー世代のトップアスリートを指導しているAさんは、日々、どのような気持ちで彼女たちと向き合っているのだろうか。

女性のライフイベントが詰まっている年代ですよ。20代前半から30代前半にかけてというのは。だから、競技もしたいけれども、私もやはり、結婚して家族を持って、自分の家族を持ちたいと思っていた時期もありました。当然、今預かっている選手たちも、子どもを産める年齢、これはもう現実問題として決まっているわけですよ。その葛藤というのか…(中略)…アスリートとして競技を続けていくことと、自分の女性としての機能を持っている間に、こうやらなくては…ではないけれども、やれるライフイベントをどう両立していこうかという悩みも、うん、やはり常にありました。今のアスリート見ていても、特に20代、30代のアスリートの課題、自分の課題というか、問題の中心にあるものじゃないのかなと思ったりしますね。

女性指導者でなければ共感できない、女性アスリート特有の悩みを上記のように語った。自分自身も競技とライフイベントの両立で悩んだという。女性アスリートの競技とライフイベントの関係については、ライフイベントを優先する傾向、つまりライフイベントをきっかけに競技から離れるという女性アスリートが多いことが指摘されている⁵⁶。「20代、30代のアスリートの

⁵⁵ 金谷麻理子、前掲書。

⁵⁶ 同上書。

課題」「自分の課題」「問題の中心にあるもの」という語りの背景には、競技と女性のライフイベントを両立させることの難しさがある。どのように折り合いをつけていくか、女性のライフイベントとの両立もスポーツ界に存在する問題の一つといえよう。以上のように、Aさんの引退後の語りからは、ロールモデルの不在、リーダーシップの欠如、そして女性のライフイベントとの両立というスポーツ界の問題が顕在化された。

最後にAさんは次のように語った。

声を上げるっていうことは、もしかしたら、リーダーシップを学ぶことにもつながるかもしれないですね。自分が主体的に、スポーツを楽しむ権利があるんだとか…何ていうんだろう…(言葉を探すようにして)うーん、抑圧されながら、人の言う事を聞きながら、「はいはい」って言う事を聞くのが、スポーツなんだという思い込みはまだまだあるような気がして。それは、指導者にも、選手にもね。特に、指導者の男性で、選手が女性という場合には、まだまだこの構図がある…。

選手たちを預かっていても、今、社会で起こっていることに対しては、問題意識とか、興味を持たないみたいなの。とりあえず競技だけやっていたらいいみたいなの子たちが多いんですけど。…(中略)…そういうところを考えるだけでも、自分たちが社会の一員なんだ、社会から切り離されたところで、スポーツなんか絶対できないからね(ということを伝えていく)、何か、もしかしたら、(こんな感じに)選手に対してアプローチしていく役割というのもあるかもしれないですね、コーチにはね。

指導者が目指すべきことは自分で行動できる自主性にあふれた子どもを育成することであり、その責任は重いという⁵⁷。また「スポーツの主役は競技者である。そして、その競技者は指導者から多大な影響を受ける。すなわち、指導者がどのように競技者を育成するのが重要なのである。女性のスポーツについては、競技者時代にスポーツの真の面白さを知った女性たちが指導者に転身し、さらにスポーツに興味をもった女性たちにスポーツの醍醐味を

⁵⁷ 阿江美恵子「学校における体罰問題：部活動の暴力的指導」「教育展望」59(7)、2013年、27-31。

伝承していこうと考えたときにはじめて、問題解決の第一歩が踏み出させるのではないだろうか⁵⁸という指摘もある。Aさんの最後の語りは、まさにこれらの指摘に合致するものと考えられる。スポーツの真の面白さを知っていなければ、あのように輝かしい経歴を残せるはずはなく、そのAさんが自主性に溢れたアスリートや次世代の指導者を育てることこそが、スポーツ界の問題を解決する突破口になるであろう。

終章

本研究では、女性アスリートとしての経験、そして女性指導者としての経験が豊富であるAさんのライフストーリーを分析し、その語りからスポーツ界の問題を可視化していくことを試みた。Aさんの語りを時間の経過に沿って整理し、女性アスリートとしてのライフコースを図に示した(図参照)。この図には①スポーツとの出会い、②ピークパフォーマンス、③スポーツからの引退、④引退後のキャリアにおけるそれぞれの象徴的な語りも含めた。これらの語りを分析した結果、セクシュアルハラスメント、ロールモデルの不在、リーダーシップの欠如、そして女性のライフイベントとの両立というスポーツ界の問題が顕在化された。つまりジェンダーの最後の砦であるスポーツ界には、現代社会のひずみを反映したジェンダーに関する問題が様々な形で横たわっていることが明らかになった。

本研究では「ライフコース論からアスリートを分析する意義の一つとして、選手の側から、選手が辿る道筋やスポーツ界の構造の把握が可能になる」⁵⁹という論に依拠しつつ、研究方法としてライフストーリーを用いた。ライフストーリー研究法は、リアリズム・アプローチとナラティブ・アプローチに分類されるが⁶⁰、今回は後者のナラティブ・アプローチを用いた。この方法は多様な語り、多様なイメージ、多様な物語の同時共存を許容し、支配的物語や優勢物語に対して、「もうひとつの物語」「異なる物語」が生まれる土壌を大切に⁶¹する。その結果として、従来は声を出しにくかったマイノリティや女性や障害者などの弱者の立場にいる人々のライフストーリーを積極的に聞

⁵⁸ 金谷麻理子、前掲書。

⁵⁹ 松尾哲矢、前掲書。

⁶⁰ 桜井厚・小林多寿子、前掲書。

⁶¹ やまだようこ『質的心理学の方法 一語りをきく一』新曜社、2007年、124-143。

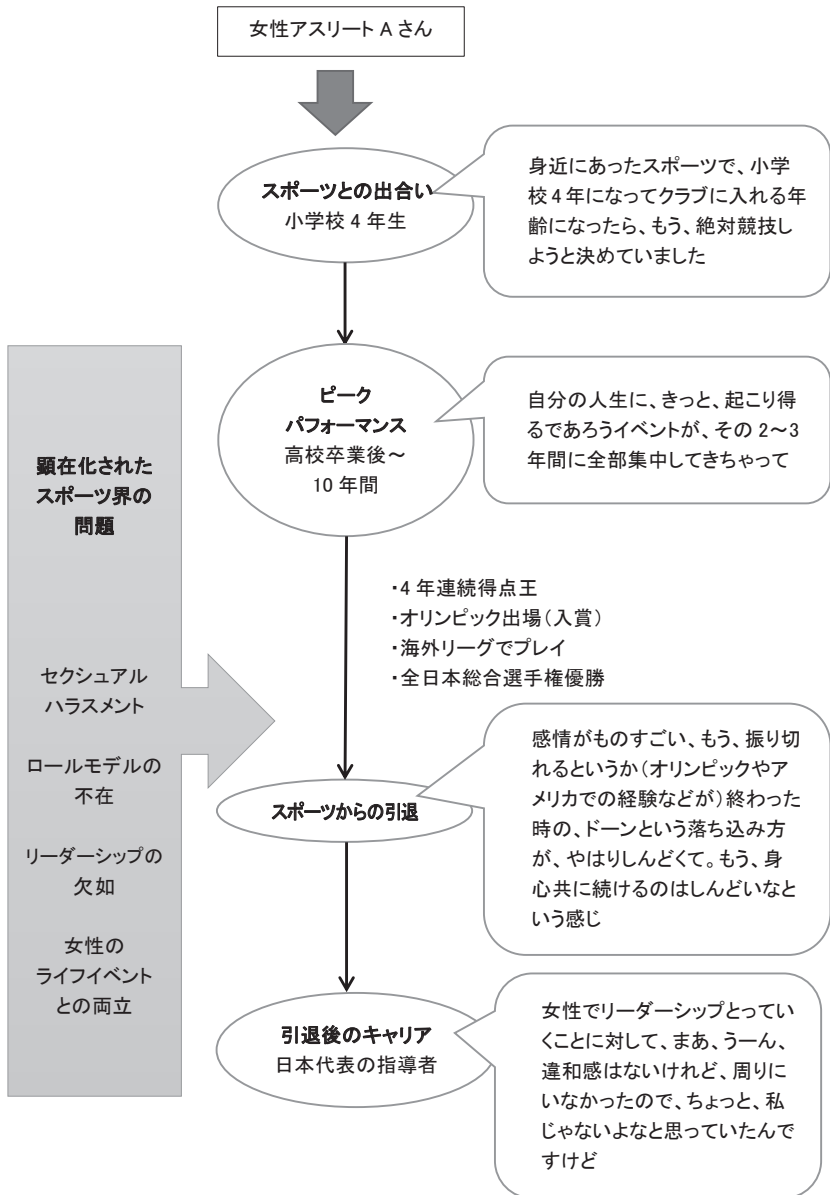


図 女性アスリート A さんのライフコースと象徴的な語り

くことができる⁶²。女性アスリートやその関係者たちは、自らが声をあげて問題を解決するには困難な状況にある弱者といえよう。

本研究では元女性アスリートで、現在は女性指導者であるAさんが、スポーツ界をどのように生きてきたかについてナラティブ・アプローチで聞き取ることが可能となった。個人のライフストーリーは、その個人に独自の語りと、コミュニティに流通する用語法、なかんずくモデル・ストーリー、そしてより広い社会のマスター・ナラティブが重層化されて含まれているという⁶³。したがって、ライフストーリーを語ることは、自己をコミュニティや全体社会との関連性のなかに位置づけるという意味で、人びとが声を公的なものとし、過去の経験を歴史化しようという試みでもある⁶⁴。Aさんがライフストーリーを語ったことは、女性アスリートや女性指導者としての自己を、スポーツ界との関連性のなかに位置づけるという意味で、スポーツに関わる女性の声を公的なものとし、過去の経験を歴史化する試みであったと考えられる。本研究では彼女の経験を歴史化する、すなわちAさんが辿った道筋を明らかにすることで、スポーツ界に存在する問題が顕在化された。これらのことより、スポーツ界の問題を可視化するにはライフストーリーが有効であると考えられる。したがって、スポーツに関わる女性が経験している語りを蓄積し、スポーツ界の現実にアプローチしていくことが今後の課題であろう。

付記

序章、第2章、第3章、終章を井上が担当し、第1章を山田が担当した。本研究は津田塾大学2020年度特別研究費の補助を得て行われたものである。面接を快く承諾して下さったAさんに、心よりお礼を申し上げます。

⁶² Josselson, R., et al. (Eds.) *The narrative study of lives*. Vols.1-London:Sage, 1993.

⁶³ 例えば、人びとが差別の現実を語ろうとすると、その語り方を引用したり参照したりするモデルとなるストーリーをモデル・ストーリーという。また、全体社会の支配的文化で語られている特権的なストーリーをマスター・ナラティブとよんで、区別している（桜井厚「ライフストーリーの社会的文脈」『語り』と出会う—質的研究の新たな展開に向けて』能智正博編、ミネルヴァ書房、2006年、73-116）。

⁶⁴ 同上書。

参考文献

- 阿江美恵子「学校における体罰問題：部活動の暴力的指導」『教育展望』59(7)、2013年、27-31。
- 荒木香織・小谷郁「トップスポーツに関わる女性のアスリート・コーチ・理事の経験を探る」『SSFスポーツ政策研究』1(1)、2011年、12-17。
- 『朝日新聞』朝刊、1985年11月18日。
- 『朝日新聞』朝刊、2001年10月2日。
- 『朝日新聞デジタル』2018年4月9日 <<https://www.asahi.com/articles/ASL4943TGL49UTQP01V.html>>
アクセス日：2021年9月16日。
- 『朝日新聞デジタル』2018年9月2日 <<https://www.asahi.com/articles/ASL926KWJL92UTQP037.html>>
アクセス日：2021年9月16日。
- グレン・H・エルダー, Jr. & ジャネット・Z・ジール編著『ライフコース研究の方法』正岡寛司・藤見純子訳、明石書店、2003年、70。
- 井谷恵子「スポーツにおけるジェンダー構造の現状を見る」『スポーツ・ジェンダー学への招待』飯田貴子・井谷恵子編著、明石書店、2004年、20。
- ジャネット・Z・ジール「多様性を理解するためのライフストーリー：階級、人種、およびジェンダーによる差異」『ライフコース研究の技法』グレン・H・エルダー, Jr. & ジャネット・Z・ジール編著(本田時雄・岡林秀樹監訳)、明石書店、2013年、306-332。
- Josselson, R., et al. (Eds.) *The narrative study of lives*. Vols.1-London:Sage, 1993.
- 金谷麻理子「女性競技者の抱える問題、女性指導者増加のための具体的方策」『体育学研究』60(Report号)、2015年、1-11。
- 熊安貴美江「ハラスメント・暴力・スポーツ—セクシュアル・ハラスメントの可視化めざすもの」『現代スポーツ評論』33、創文企画、2015年、60-72。
- 松尾哲矢「スポーツ選手のライフコース」『よくわかるスポーツ文化論』井上俊・菊幸一編著、ミネルヴァ書房、2020年、112-113。
- 森岡清美「ライフコースの視点」『ライフコースの社会学』井上俊他編、岩波書店、1996年、1。
- 森田浩之『メディアスポーツ解体—＜見えない権力>をあぶり出す』NHK出版、2009年、91-124。
- 『宮川紗江 Twitter』<https://twitter.com/sae_miyakawa> アクセス日：2021年9月16日。
- 中込四郎・岸順治「運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究」『体育学研究』35、1991年、313-323。
- 能勢さやか・土肥美智子・川原貢「女性アスリートのヘルスケア」『理学療法学』42(8)、2015年、838-839。
- オーランド・プライド『オーランド・プライドホームページ』<<https://www.orlandocitysc.com/pride/>>
アクセス日：2021年8月19日)。
- A. プティパ他著『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』田中ウルヴェ京・重野三郎訳、大

修館書店、2005年、118-153。

『さえちゃんねる / 宮川紗江』<<https://www.youtube.com/channel/UCrLjSTAyW70Sh15uE6UWUWg>> アクセス日：2021年9月16日。

桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房、2005年、7-72。

桜井厚『ライフストーリーの社会的文脈』『〈語り〉と出会う—質的研究の新たな展開に向けて』能智正博編、ミネルヴァ書房、2006年、73-116。

申恩真『女性アスリートの痛みをめぐるエスノグラフィー—サッカー選手の月経をめぐる対応から—』『スポーツとジェンダー研究』6、2018年、6-19。

『スポーツ報知』2019年12月1日<<https://hochi.news/articles/20191130-OHT1T50269.html>> アクセス日：2021年9月16日。

高峰修他『日本のスポーツ環境における大学生のセクシュアル・ハラスメント認識に及ぼす要因の影響—性別に着目して—』『スポーツとジェンダー研究』9、2011年、33-41。

高峰修『女性スポーツとセクハラ—スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識の特徴から—』『体育科教育』59(12)、2011年、34-37。

高峰修・熊安貴美江『スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識にかかわる要因の検討』『明治大学教養論集』552、2021年、175-197。

登丸あすか『スポーツコマーシャルズム』『よくわかるスポーツとジェンダー』飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著、ミネルヴァ書房、2018年、66-67。

辻口信良・岡村英祐『柔道女子トップアスリートの悩みと苦しみ』『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』森川貞夫編、かもがわ出版、2013年、93-111。

UN WOMEN『UN WOMEN』<<https://www.unwomen.org/en/news/stories/2018/7/press-release-un-women-announces-marta-vieira-da-silva-as-goodwill-ambassador>> アクセス日：2021年8月19日。

潮智史『タイトルがほしいすべての女性のために』『朝日新聞』朝刊、2021年8月1日。

『YAHOO! Japan ニュース』2021年8月13日<<https://news.yahoo.co.jp/byline/kimmyungwook/20200813-00191709>> アクセス日：2021年9月16日。

やまだようこ『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社、2007年、124-143。

山田ゆかり・井上則子『女性アスリートが抱える課題—セクシュアルハラスメントに着目して—』『津田塾大学紀要』49、2017年、249-266。

山田ゆかり『スポーツは男女を差別する 女性のための運動生理学』『週刊アエラ』1993年1月19日、63。

山口理恵子『女性とスポーツ—現代的課題—』『現代スポーツ評論』33、創文企画、2015年、36-47。

読売新聞運動部『女性アスリートは何を乗り越えてきたのか』中公新書ラクレ、2013年、147-167。

座談会『女性がスポーツする際に起きること』『現代スポーツ評論』33、創文企画、2015年、16-35。